



Title	六方ことばの系譜
Author(s)	田中, 章夫
Citation	語文. 1982, 40, p. 1-11
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68694
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

六方ことばの系譜

田 中 章 夫

一、六方ことば

六方ことばは、江戸時代初期の一七世紀中ごろ、腰に大刀を帯びて、変わった身なりで江戸市中を徘徊し、六方者などと呼ばれていた旗本奴・町奴が使いはじめた、独特なことばである。これは、奴ことばとも言われ、柳亭種彦の随筆「用捨箱（天保一二年刊）」にも、つぎのような記述がみられる。

「昔奴となへしは男達の事なり。故に当時は寛濶の字をやつこと訓ず。或は六方者といふ事は昔々物語にも出て人の知るところなり。詞もなまぬるきを忌、片言を好みていふ。かたじけないを、かたじけなうとのべ、涙をなだ、とつむるの類がぞへも尽し難し。事だをこんだ、うちかくるをぶつかける、いはゆる関東べい也。その様をかぶきに似せ、小袖のゆきいと短く無反の要刀もつとも長きを門にさしこらし手を振つて動き出。彼六方詞、名のり詞なんどいふを、演て後狂言にかかるが並て當時の風なり。おかしき事とは思はれねど昔は専ら行れしと覺しく、その六方詞のみ集めし晝草紙数種あり。當時の流行思ひ

やるべし」

六方ことばについては、早く松川弘太郎の研究があり、最近は、また、道井登による詳細な考察が発表されているが、^(注1) そうした調査・研究によって、六方ことばの特徴として指摘されているのは、つぎのような点である。

促音・撥音を伴う接頭語

トツツク・ヒツツク・カツツク・メツツク・ブツ欠ク・ブツカケル・ブツコボス・ブツツケル・ブツクダク・ブツチラス・ヒツカク・ヒツチギル・ヒツバル・ヒツタクル・ヒツサゲル・ヒツ嚙ム・ヒツ違ウ・ヒツツケル・ヒツツル・ヒツタツ・ツツタツ・ツツトブ・トツチメル・ノツチメル・カツチメル・ウツチャル・ウツ惚レル・オツ切ル・カツ張ル（殴る）・カツカジル

ツンヌメル・ツン出ル・ツン出ス・ツンナゲル・ツンナグル・ツンノコル・ツン漏ル・ツンナスル・ブンデル・ブンマク・ブンワス・ブンマカス・カンナグル・カン泣ク・カンナジル・カン飲ム・ヒン巻ク・ヒンノセル・ヒンナグル

接尾語「コイ」——ヌルツコイ・ムシツコイ・ヒヤツコイ・サム

ッ コイ・酸ッ コイ

音の脱落——ナダ(涙)・アニ(何)・アゼ(何故)・ヤダ(厭だ)

形容語——デカイ・イカイ・ザブトイ・ダタビロイ・ウルシイ(嬉)

・オモクロイ・キセチナイ(氣忙しい)・イケナイ・ガイナ・カタジューケナイ・ガイナ

副詞——ナンノカンノ・ドッ コイ・チョイト・トットト・チットモ

チャント・ワンズカ(僅)・ヤタラニ・メッタヤタラ・タント・ゲニ・スラクラ

感動詞——コリヤ・コレサ・ヤラ・シンゾ(ほんとに)・アタソコ

(案の定)・コウ

その他——シャツツラ(顔)・切レッパシ・メロー(女)・メンバチ

(飯碗)・ホデブシ(腕節)・ホテツバラ(腹)・ホザク(言う)・サ

ヘズル(言う)・口をタタク(言う)・ホノシル(惚れる)・イゴキ

(動き)がトレス・太ク出ル・光ヲクレル(威勢をつける)・ノメリ出ル(歩きまわる)・イツケ(言ったつけ)・アッタモノデハナイ(たまったものではない)・オモシロノ・アラタノ

以上のほか、終助詞の「モサ」「サモ」や文末の「ゝスルコンダ

(ゝする事だ)」、あるいは、「来る」の命令形「キロ」なども特色とされるが、六方ことばを、もつとも特徴づけるのは「よかんべい」行くべい」といった、いわゆる関東ベいの使用である。

わんざくれふんばるべいかけふばかり

あすはからすがかつかじるべい

これは、「武江年表」承応三年の条に見える、六方ことばで詠んだ辞世の和歌である。詠者は、山中原左衛門という男伊達で、正徳年中麴町真法寺で切腹した時のものという。

六方ことばの特色は、このように、関東方言の色彩が、きわめて濃厚なことであるが、さきにあげた語例からもわかるように、全体に、たいへん乱暴で卑俗なことばづかいである。しかし、そうした方言色や俗語臭と一しよに、六方ことばには、文語的な、やや古めかしい固い言いまわしもまた、同居している。これも一つの特色といふことができる。

たとえば、「ユイモウス(言申す)・見モウサ(見申す)・クレメサレ(下さい)・メナサロ(なされ)・メンワル(召上る)・マイリタ・マラス・タマウ・ハベル・オクス・候・ハジキイダス(口に出す)・イズル・ミユル・カナル・ミワタイタル(見渡したる)・ユラル・ナガムレバ・心憂キ・イト(大変)・但シ・イデヤ」などが、その例である。

喜多村信節の「嬉遊笑覧」には、六方ことばの例として、曾我狂言の朝比奈のせりふをあげているが、朝比奈のせりふについては、「歌舞伎年代記」巻之一にも、左のような記述がみられる。

抑また朝比奈の、せりふの工夫は、上方の言葉にも似合(にあ)まじ。関東べいの中に、おかしき言様こそあらん。と思ふ時に、遠き田舎より、山出しの乳母を置(おき)ける。未だ江戸馴(な)ぬ者故。一寸いふことにも。「それでつぼうがあへいときやアるによつて、早くたくりつんでるこんだア。性は(じょう)りな子だアもさア、いふことをお聞きやりもふさねへと。ちい／＼に喰(く)せるよ」杯(めづ)といへるを聞て、

是こそ朝比奈の言語に真似て、荒事をせしといふ。

すなわち、朝比奈のせりふは、荒事のせりふの典型とされたわけであり、曾我狂言が六方ことばの普及に一役かったことは想像に難

くない。そこで「男伊達初買曾我」の朝比奈のせりふを、少し引用してみよう。

「うぬは朝比奈をもなめる思案か。太い奴だ。所詮うぬが様な毒虫を生けて置けば人種がない。いつそ頭を叩きみしやいで、溝へうつちやるべい。覚悟ひろぎやアがれ」

「奴こそ、無性に駈出すは、碌なことぢやあんまいと、おつ留めたが、兄イ。討たば共と言交した兄アを出しぬいて、獨り手柄をして手向けちやア、未来の河津が受取らない。朝比奈が悪い事は云はない。いい子だ、留まれ。應つと云つて留まつて呉れたならば、近頃（かたむね）忝（かたじけなく）なすびの香の物を入れた釀汁（もろぢ）だもさ」

「面白い。然らば正月遊びの宝引きの代り、一番草摺引きと、つんでべいわやい」

こうしたことばは、おそらく、当時の江戸庶民のことばからみれば、かなり時代がかった大仰なものに感じられたにちがいない。男伊達をきそつて、相手に、ことさらに尊大に高圧的に応対するのを常とした、六方者の生態と意識が、このような仰々しい言いまわしを選びとったともいえるが、一つには、六方ことばの基盤が、武士ことばにあったためであろう。

（注1） 松川好太郎「六方言葉の考察」（『江戸時代語研究』一卷・一号）、
「六方言葉語集」（同上、一卷・三号）、道井登「奴言葉（六方詞）の研究」（『密田教授退官記念論集』）

二、六方ことばの流行

六方ことばは、簡単にいってしまえば、ことさらに関東方言をと

り入れた、きわめて粗野な武士ことばであり、はじめは、旗本の不良息子や、武士気取りの無頼の徒の間で使われ始め、次第に、中間・小者といった武家の従僕や、博徒・遊び人などに広まっていった。こうした、いわゆる、かぶき者・男伊達の用いる、六方ことばは、やがて、江戸市民の興味をひきつけ、さきに引用した、「用捨箱」の記述にあるように、さまざまな形で、たいへんな流行をみた。

例えば、六方ことばで詠んだ俳諧なども、しきりに行われ、これは、奴俳諧と呼ばれ、柳亭種彦も、「足薪翁記」の中に、

正保年間の作、百物語二四段に「近頃奴俳諧とて人のしけるを聞きしに、冬の事なりしに」

糞水にあたまかつばる水かな

といふ句に、又付ける

しやつらさむき雪の明ぼの

とあれば古き戯れなり。

と、「百物語」の中の奴俳諧を紹介している。また、一七七二年（寛文12）に刊行された、芭蕉の判になる句合せ「見おほひ」にも、

春の歌やふとく出申スうたひ初

紅梅のつぼみやあかいこんぶくろ

消残る雪間やもろあしふんごんだ

種ならばまかせておける花ばたけ

鎌できる音やちよい／＼花のえだ

ゆかしきや山の尾常はなきやるもの

小六方のホざしや菖蒲かたな身

これさ爰許へ、小六方とはざけだいたるでつちは、うるしいこ

んではあるぞ。

と、六方ことばが数多くよみこまれ、芭蕉の判詞にも六方ことばがみられる。

六方ことばは、江戸歌舞伎にも、早くからとり入れられ、すでに一六七八年（延宝6）刊行の「古今役者物語」に、多門庄左衛門という役者の、左のようなせりふが出ている。

なさけなや若衆めになやまれまらつて、たよりや御わりやまらせぬ、今日はやなか日蓮ほうへさんけいをいたして、お高僧のおめにかかつて、我御むしんを申氣だ。かるくききめさつて、若衆めが氣相平ゆふいたいたたら、れいぶんには代々まぐつたるわちがいじゆずをおつ切て、妙法のきづなにとつつかんだ。

△かんわうしにてのことば

とかふいふうちに、かんのふしに付たり、佛らしきものはめいなが、これおこうぞ月より星より大せつにけんずるわかしゆめに、病がとつつかれてからだをくるしみ申、一七日がうちによくしておくりやつ、はおこうそうとは申さない、しやつつらをひつかき申す（以下略）

有名な、花川戸助六のせりふなども、六方ことばの流れをくむものであり、「助六由縁江戸桜」の中から、少し引用してみよう。

助六「いかさま、この五丁町へ脚をふんごむ野郎めらは、己が名をきいて置け。まづ第一をこりが落る。まだよい事がある。大門をずつと潜ると、己が名を掌へ三遍かいてなめる。一生女郎にふられるといふことがなへ。（中略）金龍山の客殿から、目黒の尊像まで、御存じの江戸八百八町に隠れのねへ、杏葉牡丹の紋付も、

桜に匂ふ仲の町、花川戸の助六とも、また揚巻の助六ともいふ若いもの、間近くよつてしやッ面を拝み奉れエエ」

助六「そんなら先、喧嘩の仕やうは足が肝腎。足をかう踏張て、野郎め、ナゼ突當つた、鼻の穴へ屋形舟をけこむぞ。大どぶへ浚ひ込むぞ、こりやマまたなんの事た、とかうせねば、先の奴が怖がりませぬ」

新兵「成程、けんくわのしやうは違つたものだ」

右の「しやッ面を拝み奉れ」などは、六方ことば特有なものであり、また「こりやあ、また、なんのこつた」という言いまわしも、当時「コリヤマタ組」などと呼ばれた男伊達の典型的なせりふである。

こうした歌舞伎の世界での六方ことばの中で、特に注目されるのは、物売りや商人のせりふに、それが用いられている点である。つぎにあげるのは、当時の痰切りの薬「うゐらう（外郎）」を売り歩いた、外郎売りのせりふである。

扱此薬（葉）第一の奇妙には舌のまはる事が錢ごまがはだして逃る。ひよつと舌が廻り出すと、矢も楯もたまらぬじや。そりや／＼／＼そりや／＼まはつて来たは廻つてくるは、あわや咽さたらな舌にかけさしおん。（中略）しつかは袴のしつぽころびを。三針はりなかにちよと縫て。ぬふてちよとぶんだせ。（中略）あのなけしの長なぎなたは誰長長刀ぞ向ふのごまがらは糸の胡麻からか真ごまからか。あれこそほんのま胡麻殻がらびい／＼風車おきやがれこぼし。おきやがれこぼし。（中略）うどんかぐどんなこ新発知小棚のこ下に小桶にこみそがこ有ぞ。（中略）こす

くてこよこせおつとがてんだ心得たたんぼの川崎。(中略) 相州
小田原とうちん香隠れござらぬ。貴賤群集の花のお江戸の花うら
らう。あれあの花を見てお心をおやはらぎやつといふ。(中略)
ホホ敬て。うめらうはいらつしやりませぬか。

〔歌舞伎年代記〕卷之一

「しっぽころび」「ふんだす」「おきやがれ」など六方ことは風の
ものがみられる。

こうした、歌舞伎のせりふから、当時の物売りや商人の間に、
六方ことは行われていたことが、推定されるが、大道商人や、町
々をまわる職人の風態を写した「いとなみ六方」という草紙も残さ
れている。

なまこうり

こりやぬらりくらりと、ぬめりぬめついでたるおのこはうわべ
はつめたけれども、とつくととりいりこになつておみやれ、こた
たみをして、このわたのやうなるおてまくら、八まんふりこにせ
らるるこんではないは。

なべのいかけ

こりや君にのひつづとでた、はるのくわんすと云おのこ、おなべ
どのおちやがまのあなならば、ほかにふさぐものはおりない、
君かめしかまにしたかつて、まつひるなかでふきにくるこんだは。

つぎものし

こりや此おのこ、くわほうものではおりないか、此ほどさんやに
かくれない、よし野どのをせしめ申た、なにものがはなこくそを
かうても、かわるまひとの御なさけ、うるしいく、かたちうけ
ない。

などが、その例である。

一方、流行を追ひ、奇を好む、狹斜の巷にも、六方ことは、い
ち早く流れこみ、特に、吉原のそれは、「吉原六方」と呼ばれてい
た。

一七〇四年(元禄17)に、由之軒政房が著した「誰袖海(たがそ
でのうみ)」の巻二に、

吉原言は「呼でこいといふことを、よんできろ」「急げを、は
やくうつばしろ」「いてくるを、いつてこひ」「ありくを、あよびや
れ」「こぼすを、ぶつこぼす」「わるいと云ことを、けちなこと」「そ
うせよを、こうしろ」「おそはるるを、うなさるる」「腹の痛むを、
むしかたい」「しやんなを、よしやれ(これはよししろの略言な
り)」「こそばいを、こそぐつたい」「女郎のよこぎるを、てれんつ
かふと云。(是は唐音也)おさらばゑ、さうさ、かうさ、おつか
ない、さうすべい、所がらとはいひながら、島原の心では、さて
もうつくしい顔して、けうこつな物いひと、なんぼたしなんでも
吹ださずといふ事なし。

とあり、「嬉遊笑覧」は、この「誰袖海」の吉原ことはを、つぎ
のように評している。

元禄年中由之軒が書ける吉原言葉の不束なる事をえり出て記し
し處、呼で来いと云ふ事を呼んできろ(中略)なんぼたしなんでも
吹ださずといふ事なし、と有り、此内今もみな人のつかふ詞
もあれど、大かたは、むかしの奴とも六方ともいへる詞なり、こ
れは男子の内にも一種の鄙言にて、俛氣をこのむものゝ詞なり、

其頃は遊女もこれをこのみ、奴の名を取たる者などもあり

右に出てくる「奴の名を取りたる者」というのは、巧みに奴言葉を用いて人々を呼び、「奴勝山」というような異名をとった遊女などをさすものである。

かつて、忍頂寺務は「江戸時代語研究（第一巻・二号）」誌上に「吉原六方」という草紙を紹介したが、その内容は、左のようなものである。

是さ此まきよし原六方とでた事、われ、竹馬をおりてより、おかたづかをかひにぎり、かのさとへうちこへ、あのしなものなせぶり、此ぬれもののぬれかけや、露の情にふかくぬれ、ぬれぬさきこそ露をもいとへ、わざくれふしにふとく出て、のめや歌へとまんはちをひつくみひつかけのむ程に、したたかあひのましければ、あひのまぎれに立出て、かのちよい／＼の御さくたちひとり／＼に名をきけば、六はう詞になぞらへて、名のらせたまふ御ふぜい、これぞ寔に極楽の六はうごうかのいき如来、あつたものではないこんだぞ。

政常 京町 弥左衛門内

是さう世のきらしはめいかちおほきその中に政常がうちものよりきらすこんだは。

清原 新町 九兵衛内

これさながれをたてしよりかいてはいゑにみつどもあまはる心はいとをしくいときよはらとでるこんだは。

吉原に限らず、江戸の遊里語は、一般に、上方語的色彩の強いこ

とが、その特色とされているが、初期の吉原（元吉原）では、遊女を含めて、廊の住人の中に、近在出身が多かったため、関東方言が、かなり行われていたという。^(注1)しかし、遊女や住人の、持前の関東方言とは別に、ことさらに六方ことばをまねる傾向があり、それが、右の吉原六方と呼ばれるものである。

瀧沢馬琴も、「兎園小説別集」の「元吉原記」の中で、吉原六方に触れ、それを読みこんで、「おさらばへ、のしけをささり、こはしやうし、さふさかふさは、おつかない哉」という戯れ歌を載せている。

これも、客商売・人気商売の常として、六方ことばの流行語的な珍しさや、芝居がかったおもしろさが、遊里でもてはやされたゆえであろう。

（注2） 忍頂寺務「吉原六方といとなみ六方」（「江戸時代語研究」第一巻

・二号）

（注3） 真下三郎「遊里語の研究」（東京堂出版）・湯沢幸吉郎「奴言葉の研究」（明治書院）

三、江戸語への流れ

六方ことばの流行は、一八世紀の初め、元禄年間に終息を迎えたとされている。^(注4)しかし、その後も、前述の曾我物や助六劇など、江戸歌舞伎に受けつがれたほか、俠客・遊民のことばとして定着する一方、物売り・大道商人など、裏店住いの零細商人や下層町人のことばにも、その強い影響を及ぼした。

一七七二年（明和8）刊行の「俠者方言」は、神田辺の遊俠の徒の生息を写した草紙であるが、その会話をみてみると

十「なんだといふこのかぶつかぢりの三太郎め。イヤふてへのろまだ。いわせておきやアゑゑかと思つてつひやうじもねへ大たばな事をぬかしやアがる。うぬうたわ事をつくそのそつぽうをぶつかへてかけへひろはせるぞ。ほんのこつたがまたおれさまがこう云出しちやアおどけはらつた。もうでへつでも相手だ。どんちやアねへ」(中略)

皆々「コレ十。やかましいいはへ。おいらがいふ事もちつときいてくれねへか、コレ十、コレサ」

十「いんにや。きかねへ」(下略)

吉「なんだこいつア。きかねへ」と。へたのかへた辛子じやアあるめへし。ふらつきやうなふぬけだア。うぬがよふなやつアみせしめのために。どしやうぼねへふんべしよつていきの音エとめてやるべへ」

といった調子である。はじめにあげた、六方ことばの独特な発音(注5)・用語・語法が、各所にみられ、まさに、六方ことばの直系である。

式亭三馬の「浮世床」に登場する「いさみ肌の男」のことばにもいさ「コウ湯へ行たか」 びん「まだ」 いさ「行て来べい。ヲはんに。何は来ねへか。蜂の野郎は」 びん「来る／＼」 いさ「来る。あの野郎ア達入のねへ猿だぜ。見付たら面の皮ア引めくつて呉べい。」

など、六方ことばのにおいが強く感じられる。

ところで、同じ式亭三馬の「浮世風呂」の四編・巻之中に、行商

の八百屋や魚屋が、上方者に値切り倒されて往生する場面が出てくる。その行商人のことばを眺めてみよう。

商人「白瓜はどうだネ。唐茄子十六角豆、(中略) その外見なざる通りだ。たとと買てくんせへ。けふはべらぼうに荷が勝たから重くつてならねへ」 けち「チト爰に待居てくだんせ」 商人「おかみさんと呼ぶのかネ」 けち「食め嘆なら呼ぶ気ぢや」 商人「おきやがれ。何で待居るのだネ」 けち「イヤ一寸取て来る」 商人「器物かエ」(中略) けち「秤と算盤」 商人「秤や算盤で買居て間尺に合ふもんか、あてこともねへ。おめへ知れ切た物だはナ。能加減に直を付て買なせへ。(中略) アイ。是にしなせへ。こりやア砂村だア。いっくらも持て来るが、斯いふなアねへ。わつちらが持て来るものは、本の事たが出が違はア」 けち「ハアハ。(中略) 是なんぼ」 商人「アイ。夫で掛直のねへ所が、三十五文にして上やう」 けち「ヨウ(中略) 三十五文とはゑらいぞ」 商人「そんなに悩りす直ちやアねへ。四ツ目へ往てみねへ。本ばやりで、からッきり買附られねへ」 けち「四ツ目はさうぢやろが、(中略) ヲヲ、八文」(中略) 商人「へへ、おそろしい。チヨッ、あんまりがうはらだ。まけてやるべい」

といった具合で、ここにも、六方ことばの影響が、強くみられる。そして、上方者が、商人たちのことばを、

「チトなまろかい。何のこんだ。とほうもない。おきやがれ」

と、六方ことば風にまねてみせる情景も描かれている。

滑稽本は、ことばの資料としては、江戸の下町の下層町人の言語を写したものとされているが、一九世紀にはいつて、江戸時代も終

わり近くなると、こうした、六方ことば風のことは、必ずしも、遊俠無頼の徒や、大道商人にかぎらず、江戸の下層町人の男性語として、かなりの定着をみたように思われる。

一八二〇年（文政3）に刊行された、瀧亭鯉丈の「八笑人」は、町人たちの素人芝居のおかしさを描いたものであるが、その二編上の巻に、左のような稽古の場面がある。

アバ「またおれが待か。チョッ兎角にくまれ役だナ。左次「さうだけれど（中略）」「ムムい、どうかかうかやつつけベエ。

（中略）」頭武「アバ公何でもすつぱり拵て、びつくりさせようぜ。」アバ「ムムそしておれが役廻りは此タテ計だから、所作よりタテでぶつぎでくれベエ」頭武「おもくれへ〜」（中略）どうも素人細工では、胸でこせへてチョイトおつ建ると言訳にはいかねへ。なんでも最初から立て、押合て見るが一チばん早イヨ。

（中略）サア頭武公。」ツブ「ワットそれきた」

右の「ぶつちめてくれベエ」「おもくれえ、おもくれえ」などは、六方ことばそのまゝの受け答えであり、全体に、落語の熊さん八さんをおぼせる話しぶりである。

熊さん八さんに代表される、長屋住まいの下層町人の場合、表通りに大店を構える商家の人々ほど、ことばの上の男女差がなかった。したがって、こうした六方ことば風の語り口は、女のことばにもみられる。

した「なんだ。此がきめエ。又啼てうしやアがつたか。見たくてもねへ。どど、どいつが打た。お鬢のがきか。何だ、お鬢と二人だ。あのがきめらア。惣体依怙地悪い奴等だ。なんぞの代曲にやア、泣してよこしやアがる。うぬも又、うぬだは。あいつらに泣

せられることがあるもんか。益にたゝねへ。なぜ向の面でもおもふさま引搔むしつて遣ねへ。ソシテまア、いけ外聞の悪い。湯屋まで泣てうせることがあるもんか。能、く、待居ろ、今おれが連居て、あの親めらに誤らして呉う。全体また親めらも世間をしらねへ奴等だ。己が見ばつかり可愛がりやアがつて、他の子にはくたばらうと構ねへ。長屋中鉄棒引て、人の蔭沙汰するのが眉目でもあめめ。（中略）うぬも又、あんまりしやはげるからだは。此あめめエ」ベそ「ナアニ、おいらア、おとヲなく、あすんで居たものを、やつたらむせうにいぢめちらして、着物がきたねへの、貧乏人だのと、色々なことを云て、あのウ、そウしてからに」した「なんだ。貧乏人だ。いらざるお世話さ。あいつが内はどれほど身上が能のだ。着物を貰て着やうじやアあめめへし、そんなことは小兒のいふ詞じやアねへ。あの親めらが不斷ぬかすからのことだ。思ふさま鳴込でやるべし」

これは、「浮世風呂」の二編巻の下に出てくる母娘の対話である。それにしても、なんとも、すさまじい母親のことばだが、まさに六方ことばの正統派の観がある。

このように、元禄時代の爆発的な流行のちも、江戸の下層社会には、六方ことばの伝統は、脈々とうけつがれていたのである。

なお、右のような、六方ことば系の、粗野で乱暴な話しぶりを描いた、滑稽本の描写は、関西人などから、しばしば、作者の誇張のように評されることがある。しかし、少くとも、戦災前の下町では、このようなことばを耳にすることは珍しくなかった。したがって、

滑稽本の描写を、誇張とするのは当然のように思われる。

(注4) 国語学辞典「奴ことば(中村通夫執筆)」による。国語学大辞典は「真享期絶滅」とする。

(注5) 「俠者方言」は江戸語資料「遊子方言」と同一作者、多田爺の作であるが、前者は、明らかに遊侠の徒の言葉を写したもので、普通の町人ことばの資料としては扱えない。後者については、その上方語的色彩が、ことさらに上げられることが多いが、上方調は、江戸の遊里語全般の傾向であり、遊客も、廓では、それに同調する風があった作者・多田爺を、大阪人の丹波屋利兵衛とする中野三敏の説(「遊子方言の作者をめぐって」国文学研究・27集)があるが、「遊子方言」は、吉原(新吉原)を中心に、当時の江戸語を、かなり忠実に写したものと見てよい。小松寿雄「江戸語の形成」(松村明教授還暦記念・国語学と国語史)所収)参照

四、ペランメエ調

東京の、下町ことばというのと、「江戸だつてねえ、すし食いねえ」といった、いなせな、歯切のいいペランメエ調が、一つの特徴とされる。泉鏡花の「婦系図」に登場する魚屋のことばなどは、その典型である。

「聞きねえ、過日(こひだ)もね、お前、真個(まご)はお前、一軒(けん)かけ離れて、彼處(あそこ)へ行くの荷(か)なんだけれども、些(ち)とボカと来たし、佳(よ)い魚(うま)がなくて困(こ)るって言(い)ひなさる、廻(ま)つてお上げ、とお前さんが口(くち)を利(き)くから、チョッお薦(すす)めちゃんの言(い)ふことだ。脛(すね)を達(た)引(ひ)け、と二三度行(い)ったわ。何(なん)ちやねえか、一度お前、おう、先公(せんこう)、居(ゐ)るかいって、景気(けいき)に呼(よ)んだと思(おも)ひねえ」(中略)「すると何(なん)だ、肥満(ひまん)のお三(さん)さんが、ぶつちやう面(おもて)をしやあがつて、旦那様(だんなさま)とか、先生(せんせい)とかお言(い)ひなさい、御近所(ごきんじよ)へ聞(き)えます、と吐(は)しただらうちやねえか。ええ、

そんなに奉(たてまつ)られたけりや三太夫(さんたふ)でも抱(かか)へればいい。口に税(ぜい)を出すくらゐなら、憚(はにか)んながら私(わし)お酒(さけ)も咬(か)はなけりや魚(うま)も売(う)らねえ」
現在でも、バナナのたき売りなど、物売りのことばには、こうしたペランメエ調が、かなり残っている。岩淵悦太郎編「ことばの現代風景(筑摩書房)」の「売手と買手——浅草風景」には、つぎのような、たたき売りのことばが写されている。

「大将、前(まへ)こいよ、かまわなから前(まへ)へ、そこはけつ飛ばしてかまわねえから。みんな買(か)つて下さるかたは親(おや)のような気がすつけど、買(か)わねえ人も親(おや)のような気がすつけど、なんとなくこれ、ま親(おや)のような気がしちゃう。なんでも買(か)つてくれよ。きょうあたりはよ、風(かぜ)が強いし、また無理(無理)にお願(ご)いするから見(み)切りが強いんだ。(中略) こういうもんはねえ、種(くさね)まいてこやしやつてねえ、へエひっかけて裏(うら)の畠(はたけ)で大きくなるものと違(ちが)うんだよ。糸(いと)も使(つか)えば労働(ろうどん)も使(つか)うし、ねえ、だめかい、いらんかア、ない? え、なけりやアこれしまうよ。こんなあんた湯(ゆ)上げタオルでも、あんた買(か)つていくらすんの。最前(さいぜん)のばあさんじゃねえけれど、これ、東京(とうきょう)では風呂銭(ふろせん)あがつたんべえに、こんなでけえ手(て)ぬぐい使(つか)ったら石(いし)鹼(か)相当(たうたう)いるだんべえなアつてたけど、これ石(いし)鹼(か)いらな。ええ、買(か)えばあんた二百(にひゃく)円(えん)からしますよ、買(か)うかい、百(ひゃく)円(えん)では安(やす)い。(中略) ええも、あんまり情(なさけ)なくなっちゃったよ。ええ、きのうの、もつとも夢見(ゆめみ)が悪いと思(おも)ったんだよ。豚(ぶた)にこれ、へソなめられた夢見(ゆめみ)たし、きょうあたり男(おとこ)つぶりもいいしねえ、負けつぶりもいいんだけど、買(か)いっぶりが悪い。おとつあんないらねえかい。このサージよ。いらねえ、これ、九百(きゅうひゃく)円(えん)だ八百(はっぴゃく)円(えん)に負け(まけ)てやるよ。だめかい、ええ? (中略)おしまいで六百(ろっぴゃく)円(えん)に飛ばしてやれえい。

どうだい、ねえなア。おしまい」

明治のはじめ、仮名垣魯文は、「安愚楽鍋」を著し、当時の東京で行われていた、種々雑多なことを、みごとに描き分けた。その中で、初篇に出てくる「諸工人の狭言」などは、下町のペランメエ調の元祖ともいべき語り口である。

「エエコウ松やきいてくれあの勘次の野郎ほど附合のねへまぬけハ西東の神田三界にやアおらアあるめへとおもふぜまアかういふわけだきいてくりや夕辺仕事のことて八右衛門さんの処へつらア出すとてうど棟梁がきてゐて酒がはじまつてゐるんだらう（中略）酒を見かけちやアにげれねへだらうしかたがねへからつツぱへりこんで一杯やつけたがなんぼさが棟梁でゑくでもごちそうにばかりなツちやア外聞がみつともねへから（中略）一升とおごつたハ（中略）勘次のやらうがしいげい人のふりよをしやアがつて（中略）さんざつばらさわざいらしやアがつてそのあげ句が人力車で小塚原へおしだそうと成とかん次のしみつたれめへおさらばずゐとくじをきめたもんだから棟梁も八さんもそれなりになつてしまつたがエエコウおもしろくもねへ（中略）こちとらア（中略）附合とくりやア（中略）ばつたん国までもゆくつもりだアあいつらとハ職人のたてがみがちがハム（中略）年中十の字の尻を右へびん曲るが半商売だけれど（中略）藤取なんぞヲならべて売りやアがるのだアすッぽんにお月さま（中略）ほどちがふおしよくにんさまだアぐず／＼しやアがりやアすのうてんをたゞきわつて西瓜の立売にくれてやらアはばかりながらほんのこつたが矢でも鎧砲でもつてこいおそれるのじやアねハハへ」

以上のような明治以後の東京語にみられるペランメエ調を観察してみると、その各所に、江戸語における六方ことばとのつながりを認めることができる。六方ことばの一つの特徴とされる、終助詞の「モサ」などは、もちろん消滅し、関東「べい」も、ほとんど見られないが、ストレートな話しぶりや、促音・撥音をまじえた接頭語が、やたらに出てくる点などには、やはり、江戸の下層町人や遊民から引き継いだ、六方ことばの名残りをとどめている。

ところで、東京の下町ことばには、こうした、ペランメエ調とは、まったく趣きを異にした、別の流れもある。下町文学を代表する久保田万太郎の戯曲に登場する、下町人士の語り口などが、それである。その例として、「久保田万太郎戯曲集（角川文庫）」の中の「不孝」の治兵衛のせりふを紹介してみよう。

「寅さんは、娘を朝鮮へやつて、みす／＼不仕合にしたとそときは悔んだ。また、さうに違いなかつた。が、十年経つてみると、娘さんは、あつちで仕上げて、すっかり仕合になつてかへつて来た。まへにしたいろ／＼の心配は、つまりは、何のこともなかつたんだ。……お前さんにしたつてさうだぜ。……跡取に死なれた内儀さんに長頼ひをされた。火事で全焼になつた。なるほど不運だつた。不仕合だつた。が、それがどうだといふんだ？——だから、いま、どうだといふんだ？……みんな痕にならない傷ばかりだつたぢやないか。……寅さんが仕合なら新さんだつて仕合だ。……おしまはかういふいい娘になつた。手のかかるものは誰もゐなくなつた。家の中はいつの間にか明るくなつた。先刻、おしまにもさういつたが、いままで、ここのうちには、ゆとりといふも

のが微塵もなかった。いつでも、家中が、揃つてみんな陰気な顔をしてゐた。……うそにも、それが、いままで飲んだことのなかつた酒を、まア、かうやつて一しよに新さんと飲むやうになつた。……いままでのでいさくさとは疾うにもう縁が切れたんだ。夜が明けて朝が来たんだ。さうじやアないか、寅さん……」

ちよつと間のびした、迂遠な話しぶりであり、テンポの早い、ストレートなベランメ調とは、およそ似ても似つかない語り口である。

下町育ちの作家、小林信彦は、久保田万太郎の

——この間のあの十二人（註・戦後の落語家）は、当代に於ける一ト粒選りじゃないのか？

——残念ながら、そうは……

——行かないか？

——ええ、まあ……

——やれ、それで安心した。あれが、もし、当代に於ける代表選手たちだったら、おれは、どうしようかと思つた……

という会話の運び方を例に引いて、「屈折の多い、ものごとを明らかに言わない」話しぶりを、下町独特のものとしてゐる。^(注6)

下町ことばというと、チャキチャキの江戸っ子の歯切れのよいベランメ調を連想しがちだが、むしろ、こうした、控え目な、遠慮

がちなしやべり方が、下町ことばの主流であらう。これは、明らかに、長屋住いの熊さん八さんのベランメ調とは別ものの、大家の隠居の風格をしのばせる語り口である。江戸落語の面白味の一つは、六方ことばの系統に属する、テンポの早いベランメ調と、御隠居さんの間のびした語り口との対照の妙にあるのではなからうか。

それはともかくとして、従来の東京語研究は、どちらかというところ、山の手ことばの形成に重点がおかれ、下町ことばは、とかく軽視されがちであつた。そして、下町ことばは、江戸の町人ことばの名残りとして片づけられてしまふことが多かったように思う。しかし、同じ町人ことばでも、大店を構える上層町人と、ともかくも一戸を構えるような中層の人々、さらには、裏長屋の住人の間では、かなりの差違が認められ、^(注7)現代の下町ことばについても、日本橋と浅草では、ことばが違つたと主張する下町っ子もすくなくない。^(注8)こうした多様な下町ことばの中から、ベランメ調をとりあげ、江戸初期の六方ことばとの結びつきを考えてみたわけである。細かい点では、論証の不十分なところが多いことと思うが、大筋の流れは、以上のようなことではないかと考えている。

（注6） 小林信彦「小説にあらわれた東京弁」（『言語生活』二二五号）

（注7） 松村明「江戸語の性格」（『江戸語東京語の研究』）

（注8） 池田弥三郎「久保田文学と下町ことば」（『言語生活』六一号）・

秋永一枝「下町ことばは死語か」（『言語生活』六五号）